

ラップについて考えたこと

ラップの志向は、今感じたことを即言葉にして音楽の中に読み込み、外に向かって唄って行く。

油絵のシリーズ「言語の誕生」においても、今出て来る絵具という言葉と並べて行く。余白もなしに、かまわず次から次へと生まれ出て来るイメージはまるでラップを唄っているのと似ている。

ラップは考えながら歌を構成して行くのでなしに、生まれ続ける言葉を余白もなしにベッタリと言葉がかまわず生まれ続けて行く。

その様はまるで「言語の誕生」と同じ構造をしている。それは描くという行為そのものを対象化し、結果的に壮大な想念の森を構築する。

ラップは音の変化とは違って、言葉の強弱によるメッセージの表現で喋るリズムがその音楽の特長であって、音の構成による空間の暗示的表現より、その瞬間毎からくる言葉の衝撃の羅列で平板に並んでいるだけである。

しかしかえってその平板な文字の羅列からくる強烈な全体の意味がメッセージによって現実と直結するリアリティが厳然と存在することになる。

私の「言語の誕生」も又然りで、画面上にパースペクティブにではなく平板に並ぶ色や形によって余白が全部埋められ、絵の部分は全体がビッシリと空間を埋めつくし、全ての要素が画面上に乗っているだけといった状態になる。

それ故に言語の誕生の瞬間も、ラップの言葉が生まれ続ける瞬間と同じ構造の表現形式である。

両者は初めから或る漫然とした方向性しかなく、生れ出て来るものを選ばず、そのまゝ表現にしてしまう。その結果出来た総体そのものが作品の意味たるメッセージになる。

私の「言語の誕生」はリズムで出来ている。リズムは奥行きがなく様々な形が並んでいるあくまでも平らな世界である。

半世紀も前のことだが、私の祖父が描いた墨一色の屏風絵で楓の絵があったが、その時の強い印象として、墨絵の割に強い単一な墨色で平面的にデジタルな楓の葉が並んでいたことを思い出す。

なぜその様なことを今頃になって思い出すのかと自問してみるのであるが、その墨絵に親し

みを憶えるのであるが、その理由は、私も実はデジタルな作品を創り続けてきたからである。

デジタルな画面にはアナログの特長である調子のついた奥行きがなく、単に平面に映像が並んで印象が強い。しかしデジタルの画面はそれゆえ奥行きを読むよりも早く、その画面を視るやいなや符号として了解する。云わばアイコンの働きと同じちからを持っている。

アイコンの特長は、そのアイコンが支える意味が概念的に瞬間に意味を了解し、その意味の奥から目に見えぬアナログ的な時間の厚みが付帯加味される。

アイコンは現代社会のキーワードであって、我々現代人の持つ共通言語である。

私の祖父の楓の墨絵の葉達は、正に具象的な楓というより楓という記号そのものとして私を撃った。

その後、祖父は商業美術家として主たる要素であった文字を創る方向に行った理由がよく解った。

私は祖父のデジタルさに加えてリズムを持っている。

リズムを平面上に表現するにはラップの形式がよい。言い換えると「言語の誕生」の瞬間を創り続けることになる。

ラップという形式は音楽の構成から生れ出る瞬間の一言一言が連なってリズムとなり生まれ続ける。

絵を描くということは、私にとって見えた絵の中に奥深く空間を暗示することだけでなく、平面上にリズムがちりばめられたデジタルな絵画なのである。

トレーシングシャツに於いても、同じシャツの模様がその形体に沿って繰返して並ぶリズムの作品と云ってよい。

シャツの柄は同じ模様のパターンの繰返しで布がプリントされている。シャツの形がそのプリント柄で出来上がっている。シャツが柄を規定するのではなく、柄がシャツを規定している。用と実の逆転がアートの構造である。

繰返される柄こそラップのリズムに似ている。裁断され縫合されてシャツの形になるが、その部分の全てに同じ柄が覆っている。部分によってその柄が変化しつつ全体をまとめている。そのまとめる力こそラップのように全体をまとめるリズムである。

シャツは私の肉体のもう一つの表皮である。その表皮が私の住む山肌を東に連なって行き浅間山に達する。そのとき浅間山も私のもう一枚の私の肉体となり、山もまた一瞬たりとも休まず変化し続ける私の表皮となる。山は私であり、私は山として生きる。

以上のような思考の進むリズムもまたラップのようで休まず生まれ続けている。

2012年10月30日

島州一